言語芸術作品としての旧約聖書物語テキスト

——その共時論的研究序説——

勝村弘也

一、展望

旧約聖書の創世記から列王紀に及ぶ、いわゆる「五書」と「申命記的歴史書」の部分は、全体としてみれば物語テキストである。共時論的に見た場合、天地創造からユダ王国の滅亡にいたる壮大なひとつの物語とさえ言えるであろう。しかしまた、このひとつの物語が申命記を共通領域とする二つの大きな物語から成っており——創世記から申命記までと、申命記から列王紀まで——これら二つの中に一定程度独立したいくつかの性格の異るテキストが含まれていることは明らかである。(例えば、独立性の強いテキストとして、ヨセフ物語、ダビデ王位継承史、いくつかの「法典」「系図」「歌」などがあげられよう。)従来、この様な分析・解体作業は、近代人の歴史意識の産物たる「史的批判的」(historisch-kritisch)方法に支えられながら、段落・文・語・文字のレヴェルにいたるまで徹底して通時論的観点から進められてきた。この様な方法の最も代表的なものの一つに、五書の「資料批判」がある。この方法は、今日種々の観点から批判されながらも、何らかの形で生き延び、聖書学の方法論上のひとつの大きな柱となっている。資

料仮説は、テキスト内部の「見かけの」矛盾・緊張や記事の重複をもとに――神名の交替などによって――テキストを分解し、それらの断片を時代の異るいくつかの資料（JEPD等）に割り当てることによって成立する。もっともそのような「資料」が、最初から「文書」として存在したと考えている学者は今日ほとんどいない。[1] ところで、聖書テキストから資料を再構成する場合、解体抽出された文や語が本来の聖書のコンテキストで果している役割には、十分な考慮が払われないことが多い。仮説的に再構成された資料（文書）の方が、史的価値が高い――それ故学的認識の第一義的対象となる――とされるからである。なお、資料の摘出にあたっては、文体論的考察の中で語彙の相違に相当なウエイトがかかっている点にも注目しなければならない。例えば、Pに特徴的な語彙というようなものが考えられていて、その語彙に従って「比較的容易に」まずP資料が再構成されうると言われている。[2] しかしPを取り出したあとのJEへの資料の分割という段になると、今日同じ方法をとる学者の間で相当な意見の違いがみられる。資料批判に限らず、伝承批判の観点をとった場合でも、伝承形成の最終段階の層は比較的容易に確定できるとしても――例えばM・ノートによる申命記的歴史書の研究――それ以前の伝承層にまで同様の方法を適用しようとすると急に仮説性が高まる。[3] また、相互に類似した二つ以上の伝承間の時間的関係――例えば、どの伝承が本来的（ursprünglich）か――を議論するにいたっては、学者の好みの問題になることが多い。[4]

さて、こうして仮説的に再構成された「文書」や「伝承層」は、別に史的実証主義の立場から組み建てられた「イスラエル史」――実はこれまた、そのおおよその枠組は、旧約聖書自身から抽出（abstrahieren）された「史実」といわゆる「キリスト教的世界観」に基づくのであるが[5]――と整合性を保つ様、それぞれの時代に組み込まれて解釈される。

以上の様に、従来聖書テキストの生成(Werden)過程を跡づけることが、旧約研究の主要課題とされてきた様に思われる。[6] ところで物語の生成過程を明らかにするため、史的批判的方法が注目し依拠してきたのは、テキストの重層性という特徴である。この特徴は物語をひとつの芸術作品として共時的に見た場合には、テキストの複雑な重層構造として把握される。

聖書テキストは、すみきった秋の夜の星空にたとえることが許されよう。幾万の星々がそれぞれの光りの強さと色をもち、星座を織りなすように集まりながら輝いている。しかし自然科学の教える所によれば、星座などというものが客観的に存在するのではない。一つ一つの星は、それを観測する私とはそれぞれ非常に異った距離的関係をもっている。私の今見ている星は今そこにはない。この星は何千年、あの星は何億年もの遠い昔からやって来た光なのである。今、ここで、私の見ている星空は、そのような光の集合にすぎないのだ。しかし、私の頭上には、今現実に星空がある。そして「話すことなく、語ることなく、その声も聞えないのに」神の栄光を物語っている。[7] 星空がひとつの全体として、神の作品としてわたしにたち現れる時、その無限の美しさが感受されるのである。

H・グンケルにしろ、M・ノートにしろ、G・フォン・ラートにしろ、すぐれた文学的感受性をそなえた偉大な先人たちは、いずれも独自の史的方法を編み出しはしたが、その史的方法をある程度以上には決して使おうとはしなかった。このことは、彼らが普通、様式史や伝承史研究の開拓者として知られているだけに特に注意を喚起しておく。彼らは常にかなり大きな文学的単位、(ラートの「六書」、ノートの「申命記的歴史書」等)から目を離そうとはしなかったが、彼らの文学的感受性がそうさせたのに違いない。

G・フォン・ラートは、その著書『旧約聖書神学』「第Ⅱ部イスラエルの歴史伝承の神学」の冒頭部分において、[8]

彼に先立つ約一五〇年間の史的批判的研究がもたらした合理的「客観的」なイスラエル史像・イスラエルの精神的宗教的世界と聖書自身の語るケリュグマ的・信仰告白的救済史像の間に大きな距離が存在することを認めている。この事実は「聖書学が今日負わねばならない最大の重荷」である。どちらか一方だけの生存権を主張することはもはやできない。しかしラートが神学者として、イスラエルの歴史体験の深層部からの証言に、近代の史的研究が組みたてた歴史像以上の権利・能力(Kompetenz)を認めているのは当然である。このイスラエル独自の歴史体験(Geschichtserlebnis)は、その表現・叙述の方法と分離することが出来ない——ラートはここで特に歴史的詩文学(die historische Dichtung)としての族長に関する伝説(Sage)に特別な考慮を払っている——。このような認識は本論文にとっても本質的に重要な意味をもつ。なぜなら、旧約聖書の物語を芸術作品としてその固有の美しさを探究するということが、物語のメッセージにとって付加的価値しかもたない単なる「形式的」要素の研究などではありえないということを意味するからである。ラートが指摘するとおり、イスラエルが歴史体験を現実化する方法、その信仰が歴史的なものを描写する独自の仕方については、これまでに十分解明されてきたわけではない。かつてH・グンケルが創世記中の伝説を詩的物語(die poetische Erzählung)と呼んだように[9]、ラートはイスラエルの史的伝承の大部分が詩文学(Dichtung)であり、それがはるかに美的遊戯以上のものであることを明確に認めている。その際、彼は散文と詩文という二元的対立を否定しているが、これは正しい。また特に、小さな物語ユニット(die kleine Erzählungseinheit)の描写法に注意を促して、将来の研究方向を示唆しているが、卓見といえよう。私見によれば、この部分にこそ「言語学的詩学」(Linguistische Poetik)の方法を適用すべきであると思う。

二、物語テキスト分析に必要な探究分野とテキストのレヴェル

H・Fプレット[10]は、テキスト科学を三つの部門、Textsyntaktik（テキスト統辞論）Textpragmatik（テキスト実用論）Textsemantik（テキスト意味論）に区分する。実際に文学テキストを分析する場合の探究分野を論じるにあたっては、まずTextsyntaktikの基礎理論を知っている必要がある。記号論的な意味で、「統辞論(Syntaktik)」という時には、記号と記号の結合規則が問題になる。テキストは一定の結合規則によって連結された言語記号からなっている。この規則は文以下のレヴェルに関しては古来文法として扱われてきた。しかしそれ以上のレヴェルの問題――例えば「文の連続をテキストにしている条件とは何か」――が言語学の問題として取りあげられるようになったのは比較的最近のことである。テキストという新しい研究対象を扱うに際しては、まず文以下の言語単位（音素・形態素・文）について得られているいくつかの考え方をいわば平行移動的にテキストというより大きな単位に適用してみるという方法が試みられている。例えばA・ダンダスがアメリカ・インディアンの民話の形態論を論じるに際して使用した「モティーフ素」(motifeme)は、構造言語学の音素(phoneme)概念を拡張してえられたイーミック(emic)な単位である。[11] ダンダスはこのモティーフ素の考え方を使って北米インディアンの民話にあらわれるモティーフ素連鎖のパターンを調査した。この方法は部分的に旧約聖書中の物語の分析にも使えると思われる。

池上嘉彦は『テキストの言語学とテキストの詩学』（一九八〇）[12]の中で、「テキスト性」(textuality)の概念を使って、芸術的なテキストを構造論的にとらえようとしている。「テキスト性」という概念は、文以下のレヴェルの問題

を扱う際の「文法性」(grammaticality)の概念に対応し、それを補完するものである。テキスト性の概念によってわれわれは、ある文の連鎖がテキストを成しているか、また「テキスト性の度合」が高いか低いかを判断することができる。例えば、シーザー(J. Caesar)のことば、Veni (=I came). Vidi (=I saw). Vici (I conquered). は、その文の順序をかえた Vici. Veni. Vidi. に較べてずっとテキスト性の度合が高いと言える。池上氏は文以上のレヴェルの問題にアプローチする方法を大きく次の二つのやり方に分けている。(1)細部的ないし微視的な構造(microstructure)——テキストを構成する個々の具体的な文と文の間の関係に注目するやり方。(2)全体的ないし巨視的な構造(macro-structure)——テキストが何らかの全体的な構造のもとに統合されているかどうかに注目するやり方。[13]

(1)の方法は、W・ドレスラーのテキスト言語学やH・プレットのテキスト学の方法に相当する。[14] ただし、池上氏のこの論文では文以下のレヴェルがほとんど考察の対象となっていないが、プレットの場合文間の問題と文以下のレヴェルの問題とは有機的関連にあるものとして考察されている。(2)の方法には、プロップによる「機能」の連辞論的関係、即ち物語の筋の研究[15]や、その影響下にフランス構造主義者が展開している方法等がある。旧約学においてモティーフ研究は以前から存在したが、構造論的観点が入ってきたのは、ごく最近になってからである。また物語の構成(Komposition)や枠(Rahmen)についても論じられてはいたが、ほとんどの場合通時論的考察との関連においてであった。特に五書研究においては、最初に資料分析が行なわれるため、全体的構造の問題はほとんど学問的関心の外側にあったと言える。[16] 枠の機能もその内側の部分との構造的関係という観点からみられていたわけではない。Pによる編集、付加拡大等として片づけられることが多かった。[17]

さて池上氏の論文では、(1)ミクロ的(2)マクロ的、それぞれのアプローチがテキスト性との関連で試みられているが、

芸術的テキストの場合、かなり「非テキスト的」な表現――つまり通常のテキストの基準（norm）である結束性（cohesion）が、接続詞や論理的関係を表わす語句の省略によって破られる等――が可能であることが観察されている。しかし、テキスト性といわゆる文学性（literality）や詩性（poeticality）との間に相関関係はない。池上氏は将来実用論的（pragmatic）な要因を含めたテキスト理論からのアプローチが必要であることを指摘して論文を締括っている。

伊藤一郎の論文『ロシア・フォークロアの言語と詩学』[18]は、言語芸術としてのフォークロアのテキストを共時的な体系としてとらえ、(1)音韻、(2)形態、(3)統辞の各レヴェルの分析に、(4)題材構成及び(5)作品行為のレヴェルの分析を加えて論じている。(1)～(3)では、各レヴェルのパラレリズムが有機的に論じられているが、旧約聖書テキストとの関連で以下の点が特に興味深い。それは、ロシア・フォークロアが、「同語根の語、あるいは接頭辞接尾辞を同じくする語を産みだす文法的手段が豊富である」というロシア語の言語的特質を十分に活用しているという指摘である。後に見るように旧約聖書テキストも同様のヘブル語の特質をさかんに利用している。(4)題材構成のレヴェルでは、モチーフの可能な結合形式が論じられる。ただしこの論文の力点はここにはない。(5)では、フォークロアの特質としての演劇性が問題となる。つまり民話の語り手や叙情歌の歌い手は、いわば登場人物を演じながら作品を構成していくのである。[19]この様に、この論文ではテキストが実用論的な側面からも考察されている点に注目したい。

プレットやCh・キュパー[20]の文学的あるいは詩的テキストの分析法を見ると、音韻・形態・統辞の各レヴェルに加えて、graphemische Ebene（「筆写記号レヴェル」と訳しておく）と意味論的レヴェルの分析がある。日本語で書かれた詩の場合には、漢字と仮名のまぜ具合などが筆写記号レヴェルの問題となる。旧約学もこのレヴェルの問題と無縁ではない。テキスト・クリティークがこの問題と関係するのは言うまでもない。ここでは別の問題、印刷された聖書

テキストが研究者に及ぼす影響といった点に触れてみる。Kittel の版も Stuttgartensia の版も、韻文は並行法（Parallelismus membrorum）の原則に従って印刷されている。そのことから生じる第一の問題は、読者に散文―韻文という二元的対立が聖書テキストに存在するとの強い印象を与える点にある。詩篇第一篇は最近の研究に従うとむしろ散文と見た方がよさそうであるが、[21] 筆者の知る限り翻訳も含めて印刷された聖書はすべて韻文であるとの印象を与える。物語テキストの場合、Kittel と Stuttgartensia を見比べてみると、前者の方が物語中に多くの韻文が含まれている様に見える。研究者はこの様なテキストのもつ作用に無自覚であってはならない。テキストの意味論的分析については、後程しかるべき場所で論じることにする。

以上、テキストの構造論的観点からの分析法のみをとりあげたが、従来の文体研究における分野区分についても補足的に見ておきたい。小林英夫は、『文章の美学』（一九五四年）[22] において、美学的考察の対象たる芸術文（文学文）の文体を研究するに際して、文体の特性づけに必要な標識――この点についてはここでは紹介する必要がない――と、その探究の分野について論じている。以下に列挙する探究分野は、小説の分析を念頭においたものと見てよい。一、構成論――テーマの布置配列を調べる。これは、(a)全文構成(b)段落相互関係、に分れる。二、文間文法論――各段落内の文が(1)意味的にどのように関係し合っているか、(2)どのような文法的手段によって結びつけられているかを調べる。（この分野はだいたい池上氏の「細部的な構造」に相当する。）三、構文論――S―Pの配列順序、文の長さ。四、品詞論。五、語彙論。六、形容論――比喩、ライトモティーフ等。七、リズム論。八、テンポ論――小林氏は別の論文『文体論の建設』（一九四三）において構成、文間文法、リズム論との関連でテンポの問題を総合的に扱っている。九、描写技法論――いわゆる「描写」と「説明」の使い分けなど。

構造言語学のいうテキストのレヴェルに従った探究分野の区分方法は、一見きわめて合理的にみえるが、実際の芸術文は各レヴェル相互の関係が非常に入り組んだ形で存在するので、それぞれのレヴェルの問題を切り離して考えるわけにはいかない。そこで小林氏の文体研究にみられる様な総合的な問題のたて方――たとえばリズム論、テンポ論等――も必要となってくる。

なお、以下の論述においては、おおよそ段落以下のレヴェルを扱う時「ミクロ構造」、段落以上のレヴェルを扱う時「マクロ構造」という用語を使うことにする。池上氏の用語法とは異るので注意しておく。

三、物語ユニットとマクロ構造

A　グンケルの観点と物語の記号論的研究

H・グンケル[23]は、創世記を伝説の集輯と考えたのであるが（Die Genesis ist eine Sammlung von Sagen.）、主要な研究対象となるべき統一体は、単一伝説（Einzelsage）であるとした。単一伝説とは創世記第一六章の「ハガル逃亡の物語」や二二章の「イサク犠牲の物語」のような、かなり短いまとまりで、口伝承段階において元来独立した伝説であったという。この単一伝説は、明確な物語のはじまりと終りを持ち、同じ統一的気分（dieselbe einheitliche Stimmung）に支配されているとする。グンケルは、これらの多くの伝説が後代になって、より大きな芸術作品へとまとめあげられていったと考えているのであるが、現在の創世記テキスト中のまとまり、アブラハム物語、ヤコブ物語といった単位の下に Sagenkranz（「伝説サークル」とでも訳すべきか）と名づけられる伝説集を考えている。[24] ヨセフ

物語は（創世記三七―五〇章）一つのSagenkranzである。ここではヤコブ物語を例としてとりあげてみる。グンケルはまずP資料をはずしたあとJE（いわゆるイェホヴィスト）によるヤコブ物語――フォン・ラートはこれをヤハウィストの作品とみる――の構成を詳細に観察して、以下の四つの構成要素を取り出した。[25]

(1)ヤコブ―エサウ伝説サークル（創世記二五章二一―三四節、二七章、三二―三三章）。(2)ヤコブ―ラバン伝説サークル（二九―三一章）。(3)ヤコブの建てた聖所に関する伝説（ベテル、マハナイム、ペヌエル、シケムの祭儀伝説）。(4)ヤコブの子らの誕生とその運命に関する物語。

はじめの二つの伝説サークルの関係をくわしく見ると、(1)は(2)を枠づけており、さらに、統一性のある芸術的な構成をもつヤコブ―エサウ―ラバン伝説サークルを形成していることがわかる。グンケルは、この伝説サークルは非常に古い時代に成立したものと考えている。ヤコブ物語の構成についてはあとでもう一度ふれることにする。

さて、グンケルは個々の小さな物語単位を見る場合、それが伝説（Sage）と呼ぶに価するものであるかどうかを判定する一つの規準として、一度語り出された話が終りまで十分に物語られているか否か（ausgeführt oder nicht）を問題とした。三二章二―三節（協会訳一―二節）や三三章一八―二〇節は厳密には祭儀伝説というよりも、Notiz（メモとか短信と訳すべきか）なのであり、十分物語られてはいないということになる。彼がすでにこの様な点にまで考え及んでいたことは、実に驚くべきことの様に思われる。なぜなら、この視点は物語の記号論的研究に相通じる所があるからである。

そこで、プロップ以後の物語の記号論的研究を参照しつつ以下の論述を進めることにする。プロップは、ロシアの魔法民話を対象に登場人物の行なう行為の型――それを「機能」（Funktion）と呼んだ――の連辞論的関係を調べた。

魔法民話の場合、機能の数は三十一個（つまり有限）あってその配列順序は常に一定であった。はじめこの研究はあまり知られていなかったが、西ヨーロッパの各国語に翻訳されるや、民話研究のみならず、物語研究全般に多大の影響を及ぼした。問題はロシアの魔法民話に関する構造分析の方法が他の文学ジャンルに属する物語の研究にどの程度適用可能かという点にある。ドイツの新約学者E・ギュトゲマンスは、プロップの機能分析の方法をほとんどそのまま福音書中の物語の分析に使用したが、全体にこじつけとの印象を否定することが出来ない。[26] しかしながら、プロップの機能リストの中の「禁止」「違反」「瞞着」「害」「出発」「戦闘」「勝利」「追跡」「救出」……等の項目が、旧約聖書の物語テキスト中に頻繁にあらわれるのも事実である。A・ダンダスは、先に述べた様に、プロップの機能をイーミックな、つまり構造的な単位である「モティーフ素」に改造して、分析方法を一般化しようとした。ダンダスが北米インディアン民話において、中核的な二個のモティーフ素の連鎖とみているパタンは、「欠乏」と「欠乏の解消」である。欠乏は「L」(Lack)、欠乏の解消は「LL」(Lack Liquidated) という識別記号で表わされるが、欠乏は過剰であってもかまわない。L→LLは、「不均衡から均衡への移行」を表わすのである。創世記第二章一八―二四節は明らかにそのようなパタンを中心に物語が構成されているが、ヤハウェ神のはじめの試み――ひとの助け手（ezer）として動物をつれて来る――は失敗している。そのような可能性をも考慮に入れてより包括的な物語生成の図式を考えたのが、C・ブレモンである。[27] ブレモンのいう基本的要素連続 (séquence élémentaire) とは、次の三つである。

(1) 取られるべき行動とか予想される事件などの形をとって、経過の可能性を開く機能。

(2) それらの潜在性を、行動や事件の形のもとに実現する機能。

(3)その経過を、達成された結果という形のもとに、閉じる機能。

話者は、可能性を実現する自由も、実現しない自由も常に保有しているから、この点を考慮に入れて可能性の網を図式化すると次の様になる。

潜在性 (éventualité)
- 実現のプロセス (passage à l'acte)
  - 目的達成 (achèvement)
  - 目的達成されず (inachèvement)
- 実現のプロセスの欠如 (non passage à l'acte)

先に例にあげた創世記二章の物語では、右の図式が二回くりかえされている――一回目では目的達成されず――ことになる。ブレモンの図式は非常に抽象的であるから、どのような物語にも適用可能にみえるが、筋の複雑なテキストの分析に使うには具体性がなさすぎる。旧約学者のC・ヴェスターマンの場合最近の『創世記注解』で、族長物語を扱うに際してあらかじめ、「物語」の定義を試みている。「物語とは、ある緊張が解消される出来事を創作したものである。」(《Eine Erzählung dichtet ein Geschehen von einer Spannung zu einer Lösung》緊張から解決(解消)へと向う語りのアーチによって物語は完結性を有することになり、語り手は聴き手とともにこの語りの形態に参与することになる、[28] とのべている。このヴェスターマンの定義の仕方には、明らかに実用論的観点が含まれている。――族長物語は世代から世代へと語りつがれてきた出来事なのである。「語る者は、彼の語ることがらを経験、彼自身のあるいは報知された経験から受けとる。そして、彼はそれをふたたび、彼の物語(Geschichte)を聴きとった者の経験とするのである。」(W・ベンヤミン)――ヴェスターマンの物語の把握の仕方は、S・O・レッサー等の「精

神分析から見た文学の作用理論」に類似しているとも考えられる。[29]「緊張」とは何よりもまず心理的出来事だからである。レッサーは文学の作用に欲求解除（つまり解決）を見ている。しかし、W・イーザーの次の批判が、レッサーにもヴェスターマンにも妥当すると思われる。「確かに葛藤は文学テクストの主要素ではあるが、その解決策まで描かれているか、それは疑わしい。」聖書の物語テキストの場合、比較的小さな物語単位を観察する限り、「緊張から解決へ」あるいはダンダスの言う「L→LL」の運動が、たいてい発見できる。しかし、ブレモンの示した様に、それは「悪化の過程」であるかも知れない。[30] この様なプロセスを含む比較的小さな物語単位を、物語ユニットと呼んでもよいだろう。（これはグンケルのいう単一伝説（Einzelsage）にだいたい等しい）。聖書の大きな物語単位を考えてみると、テキストが描き出す葛藤（あるいは課題）は、その解決・解答がテキスト中に明示されているとはとうてい言えない。それはむしろ読者に新しい課題をゆだねている様に思われる。創世記第三章の終り方、申命記の終結部（つまり五書の終り）、列王紀下のエホヤキンに関する記事（これはまた使徒行伝の終り方に似ている）、四つの福音書の終結部のことを想い出せば十分である。

B　ヤコブ物語の全体的構造

アブラハム物語の場合、その全体的構造は非常に見通しにくい。系図や祝福の約束等が外側の枠を構成していることは一般に認められているが、一四章は孤立しており、前半部（一二―一九章）ではソドム・ロト物語とアブラハム・ロト物語（グンケルのSagenkranz）が相互に入り込んでいる。ケスラーは二〇―二二章を「ネゲヴ・グループ」と呼んでいる。アブラハム物語の構成の問題は、研究がはじまったばかりといってよい。今後通時論・共時論の両角度から考察されるであろう。[31]

それに比べるとヤコブ物語の構成は、最近共時論的観点からいくつかの興味深い見取図が提示されている。まず、P・ワイマールはPによるヤコブ物語の構成を調べ、それが大きく三つの部分（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）から成る美しい対称構造を持つことを発見した。[32] ⅠとⅢはそれぞれ二つの系図（Toledot）からなり、Ⅱは、ルズ―ベテルでの神顕現を中心に「ヤコブの移動」が内側の枠を作っている。しかしこの分析はPだけを観察しているので、中心が著しく後方（創世記三五章）に寄っている。その後、M. Fishbane と J. G. Gammie が物語全体の対称構造を見つけた。[33] その概略を記すと、A、系図、二五章一―一一。B、アブラハムの死からエサウとヤコブの誕生まで、二五章一二―三四。C、争い・欺瞞・契約、二六章。D、兄弟の争いの開始・祝福を盗む、二七章。E、ヤコブの出発・ベテルの神顕現、二八章。F、到着・ロづけ・欺瞞による結婚等、二九章。G、息子の獲得等、三〇章一―二四。G′、出発準備、家畜の群れの獲得、三〇章二五―四三。F′、出発と追跡・ロづけ・欺瞞・契約、三一章一―三二章三。E′、ペヌエルの神顕現・イスラエルと改名・祝福、三二章四―三三。D′、兄弟の争いの終結・祝福の贈り物、三三章一―一七。C′、争い・欺瞞的契約等、三三章一八―三五章五。（ベテルの神顕現・イスラエルと改名、三五章六―七、九―一五。ここはE及びE′とパラレル）。B′、ベニヤミンの誕生・ラケル及びイツハクの死等、三五章八、一六―二九。A′、系図、三六章。以上である。この物語は、プロップやダンダスの方法を使った分析も可能と思われるが、紙面の関係で省略する。

四、創世記第一七章の芸術性

ヴェスターマンは、自身の物語の定義に基づいて、ある段落が物語か否かを判定している。「系図」「旅程記」(Itinerar)は物語ではないという。創世記一七章や二九章三一節―三〇章二四節も、その定義に従って物語ではないと判定している。しかし、この点はきわめて疑しいと言わざるをえない。ここでは一七章を検討してみよう。この章は、ふつうP資料に属するとされている。ヴェスターマンによれば、この章はPが彼に先行する種々のアブラハム伝承(一二章一―三、一五章、一八章等)に倣って書きあげた文学作品である。その際Pは、この章全体をほとんど一方的な神の語りかけという形で、彼にとってアブラハム物語全体に本質的と思われたことがらに描写を集中するという方法をとった。つまり個々の出来事には関心がないという。また、章の構成法や文体については、細部にいたるまで熟慮された芸術文と見ている。[34] 問題は二方向から設定されよう。まずPの文体について、次に一七章と前後の章との関連性についてである。

Pの文体は、伝統的見解に従うと一般に単調で定型(Formel)を好む、形式ばった、反復の多い、たいくつな文だとされている。物語は列挙(Aufzählung)によって脅され、ポエジーは図式によっておしつぶされているともいわれる。[35] しかし、Pの代表的作品とされる創世記第一章の天地創造物語はどうであろうか。非常に荘重で美しい詩的作品ではないか。最近の研究には、Pの文体を――全部ではなく一定範囲内のものを――文学性の高いものとする傾向が認められる。(詳しくは、関根正雄著『旧約聖書文学史 下』二三二―五頁あたりを参照のこと)。創世記一七章の文

体に関するヴェスターマンの見方もこの様な傾向に合致する。しかし同一資料（文書）に属する文章が、一方では非常に詩的芸術的と見られ、他方では全く文学性の乏しいつまりへたな文章と見られるとはどういうことなのであろう。もちろんこのことは、P自身をさらに通時論的に分解する――例えば「基本文書」（P^g）と「二次的文書」（P^s）に分けるとかP以前の伝承層を想定する等――ことによって辻褄を合わすこともできよう。

ここでは、全く観点を変えて、情報理論を導入することにより、従来Pとしてひとまとめにされてきた資料に批判の目を向けることにする。先の池上論文は、芸術文には、通常のテキストの基準からはずれたものが存在することを指摘していたが、これは従来の文体論が文体というものを「不意打ち」（ヴァルガ）「欺かれた期待」（ヤコブソン）「逸脱」「偏差」などによって成り立つものと見ていた見解と一致する。このような観点によって、文体理論と数学的な情報理論との間に一定の関係がつけられることになる。[36] しかし、まず第一におさえておかねばならないことは、「情報理論では、受信者にとってそのメッセージがいかなる重要性、あるいは重大な意味を持つかは考慮に入れず、ただこのメッセージの送信だけを考える」（マルティネ）という点である。従って芸術テキストを分析するためには、エーコの様に「コード理論」を使う等の新しい観点が必要である。だが、ここではまず「P資料」が冗長性の大きなテキストであることを確認したい。以下に情報理論について手引きとした文献を挙げておく。

文献(1)A・マルティネ編著『言語学事典』大修館（一九七二、原著一九六九）。26、冗長度、27、情報及び14、計量言語学。他に同著者『一般言語学要理』（原著一九七〇）。
(2)J・デュボワ他著『言語学用語辞典』大修館（一九八〇、原著一九七三）。「冗長性」及び「情報」の項。
(3)堀淳一著『エントロピーとは何か』講談社ブルーバックス（一九七九）。特に「2　でたらめさを測る」及び「8　情報理論とエントロピー」を参照。

「エントロピー」は、元来熱力学等で使われてきた「でたらめさ」、不確定性を測る尺度である。エントロピーSは、S＝KlogW（ただしWは情報の総数、Kは定数）によって定義される。でたらめさが大きいほど情報量も大きいことになる。何が出てくるかわからない、予測の難しい、意外性に富んだものがその逆のものよりも情報量が大きい。従ってまたそれはおもしろいということになる。冗長性（仏 redondance 英 redundancy）は、修辞学の用語を情報理論の研究者と言語学者が借用して、これに正確な技術的意味を与えた。修辞学では冗長性は文体的あや、「反復」とほぼ同じ意味を持っていた。情報理論では、「冗長性（度）とは、所与の情報量と仮想の最大情報量との比率である」と定義される。ふつうは、この比を相対情報量として、

冗長性＝1－相対情報量（%）

で表わす。実際に送信される情報量が、送信可能な最大情報量に等しければ冗長度はゼロになる。冗長度が高いと予測性は高まる。「コードの構造や特定のメッセージの中にあらわれる情報量の減少はすべて（反復や連辞上の拘束等）。その原因はいずれにあろうとも、このコードあるいはメッセージの特性的な冗長性」とかかわる（マルティネ）。冗長性にはメッセージの送信において積極的な役割がある。冗長性は雑音（bruit）、つまりあるメッセージの送信を妨げる可能性のある現象の総体、に対する防御の意味をもつ。ある自然言語からなるテキストの場合、反復や定型（Formel）表現の多い、つまり冗長度の高いテキストだと雑音が入っても原文をよくとらえることができる。虫喰い、破損の多い古文書でも冗長度が高いと予測がそれだけ容易になるから、原文の復元が可能となる。挨拶状のような月並みなテキストは冗長度が高い。プロップの研究対象としたロシアの魔法民話の場合、「機能（モチーフ）」の連辞論的関係がほとんど予測されるわけであるから、その限りでは冗長度が高いといえる。推理小説だと、このような自動的連辞関

係は破られる必要がある。物語の途中で全く意外な新しい情報を加えてエントロピーを増大させないと読み手はたいくつする。

では、反復の多いテキストが必ず情報量の少い、つまらないテキストかと言うと、そうはいかない。ここで議論をより厳密なものにするため、「情報」のかわりに「意味」を扱う「コード理論」を導入する必要がある。

文献(4)U・エーコ著（池上訳）『記号論Ⅰ・Ⅱ』岩波現代選書（一九八〇、原著一九七六）。特に「美的テクスト」に関する考察（II pp. 190-217）を参照。

(5)W・イーザー著（轡田訳）『行為としての読書――美的作用の理論』岩波現代選書（一九八二、原著一九七六）。「Ⅱ機能史から見た文学のテクストモデル、Bテクストのストラテジー」における、フォルマリスト等の「逸脱モデル」に対する批判参照（pp. 149-181）

(6)Yu・M・ロトマン著（磯谷訳）『芸術テキストの構造』（原著一九七〇）、『文学理論と構造主義』勁草書房（一九七八）所収。特に「コード転換」の理論が重要である。

(7)A・マルケーゼ著（谷口訳）『構造主義の方法と試行』創樹社（一九八一、原著一九七四）。「第四章、詩的テクストの分析」におけるグレマスのイゾトピーの応用が興味深い。pp. 164-203、その他 pp. 43-55, 135-158 参照。

芸術テキストにおいては、音素・形態素・語・語結合・文とさまざまなレヴェルで、さまざまの形で――リズムや韻はその一形態――反復が起る。エーコが「美的な過剰コード化」と呼んでいる様な、著しい「冗長性」を示すテキストを東西の詩文からあげてみよう。

① 山村暮鳥『風景　純銀もざいく』（全集第一巻一〇一頁）では、「いちめんのなのはな」が各連に計八行出現する。例えば、第一連では八行目「かすかなるむぎぶえ」以外はどこも「いちめんのなのはな」である。印刷された詩は、なのはなが縦に整然と並んで立っているという印象（graphemisch な効果）を与える。麦笛はたしかにかすかに

読みとられる。

② 北原白秋は、同語反復を好んで使う。特にオノマトペの反復は、独特の雰囲気を醸し出す。『野茨に鳩』の「おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、おお、ほろほろ。」の反復は、空しく過ぎてゆく春の一日をけだるく表わしている(h音とo音の象徴的効果にも注意)。『落葉松』における「からまつの林」の反復では、作者の歩みと自然のリズムが内的に統一されている。その他、『トラピストの牛』『鋼鉄風景』等、同語反復はこの詩人の最も得意とする手法であった。

③ Gertrude Stein (1874–1946) の As a Wife Has a Cow: A Love Story の冒頭部は、Nearly all of it to be as a wife has a cow, a love story. All of it to be as a wife has a cow, all of it to be as a wife has a cow, a love story. である。ここには特別な単語や文法的破格という程のものはない。しかし過剰さが何か非常に意味内容の豊富な、含みのある極度に曖昧なことを述べているとの印象を与える。この詩人は、Even now, now and even now and now and even now. の様な表現を好むが、「過剰に伝達する。故にそれは何も伝達しない」(ヒーコ)と言えなくもない。[37] だがスタインの詩は非常に emotional である。

次に旧約テキストから例をあげる。[38]

例文—1　創世記第一章二七—二八節 a α

27. 1 wjbr' 'lhjm 't-h'dm *bṣlmw*　　And God created the man in his image

27 .2 *bṣlm 'lhjm* br' 'tw　　in (the) image of God (he) created him

27. 3 *zkr wnqbh* br' 'tm　　male and female (he) created them

28.1 wjbrk 'tm 'lhjm　　And God blessed them

創世記一章の天地創造の詩的物語には全体に反復が多いが、この箇所は人間の創造というそのクライマックスの部分である。音素レヴェルでみると、/b/r/m/l/が多いがこれらの音素によって神（エローヒーム）造る（バーラー）ひと（アダム）の語が構成されている。これらはまた二八節中の増大する（v/rbh）満ちる（v/ml'）をも構成する。一行目二行目はW（オー）三行目四行目はmの脚韻を持つ上、一行目と四行目の冒頭語と二行目三行目の終りの二語は著しく音的に類似する。神が造る（バーラー）とは神が祝福する（バーラク）ことなのである。パラレリズムによって、第一次的（つまり日常的言語の）構造のレヴェルでは等価でない二つの語が意味論的等価性を獲得する。一行目と二行目は明らかに交差配列的（chiastisch）構文となっている。造る・神・人・似像：似像・神・造る・人という順である。これは一種のタウトロギー（Tautologie）であるが、中心部の「神の似像」ということばが特別の重みを持つことになる。（二六節の神の決意のことばを受ける。）この曖昧な語は三行目の「男と女」と構成上完全にパラレルとなって注意深い読者に何か言いあらわしがたい秘義を共示するようである。事実、D・ボンヘッファーやK・バルトはそこから「関係の類比（analogia relationis）」という重大な神学的主張を導き出したのであった。[39]

例文―2　創世記第一七章七節

7.1a whqmtj 't-brjtj　　And I will establish my covenant

7.1b bjnj wbjnk wbjn *zr'k 'hrjk*　　between me and between you and between your seed after you

7.1c ldrtm lbrjt 'wlm　　to their generations to an everlasting covenant

7.2　lhjwt lk l'lhjm *wlzr'k 'hrjk*　　to be to you to God and to your seed after you.

原文の感じを出す様かなり奇妙な英訳をつけた。ヘブル語の前置詞1をすべて to と訳した。とにかく形態素レヴェル（前置詞、Suffix、Affformativ）の反復が多い冗長度の高い文であるが、特に後半の1の反復は過剰コードと言える。ロシアのフォルマリストは美的テキストの特徴を「異化」つまり「見なれないものにする手法」と呼んだがそれはこの様な文のことを言うのであろう。節の後半の意味は曖昧でたしかに「知覚をより困難にし、知覚の持続時間を長引かそうとする。」[40] 7・2の「おまえの神となる」という表現は、8節で反復されて印象深いものとなっている。さらにこの表現は、いわゆる「契約の定型（Bundesformel）」として知られている（出エジプト二九章四五、レビ二五章三八、民数一五章四一節）。そのことがこの文を理解しやすくする。しかし定型が使われ反復が多いからと言って情報の少いたいくつな文ということにはならない。テキストは神の立てる契約が代々末永くいつまでも続くことを表現しているのであるから、それにふさわしい文体をとったのである。1の多用は音象徴という面から言うと、柔かい平和な感じがすると思うがどうであろうか。なお/1/音は八節にもつづいて現れる。「おまえの後の子孫」は、二行目四行目の末尾に反復されているが、八節のはじめ、九節十節にもくる。この表現はこの章のキーワードと見られる。物語全体のテーマがまさにアブラハムの子孫をめぐって展開されているのだから。なお、七節全体の縮小形が一九節後半に現れるがイツハクと関係している。

例文―3　創世記一七章一五節

15.2 śrj ʾštk lʾ-tqrʾ tʾ-šmh śrj　　おまえの妻サライは、名をサライといってはならない、

15.3 kj śrh šmh　　なぜなら名はサラだから。

語順が一番問題である。統辞論の一般的な問題は以前論じたことがあるので略すが、[41]「おまえの妻サライ」が文頭

に来た理由を考えてみる。まず、五節でアブラハムの改名があるのでそれと対比するためと言える。15・2だけを見ると「サライ」は最初と最後にくる。15・2のおわりと15・3を比べると、「彼女の名・サライ：なぜなら・サラ・彼女の名」と交差配列になっている。音的要素では/ś/と/š/の遊びがある。この点を考慮して全体を図式化すると、A・B′・X_1・B・A：X_2・A′・Bとなる。パラレリスムとキアスムスの見ごとな例文と言えよう。語尾を見るとjとhの対比がある。これは名前の変化した部分なのである（śrj→śrh）。なお、一九節の神のことばでも、「おまえの妻サラ」が強調されている。一九節についての先の観察とあわせ考えると、構成上アブラハムの子孫に関する神の約束とサラの子の約束が一九節で合体している。ここに最も重要なメッセージが含まれているのである。

ここで今までの論述をまとめてみると次のようになる。従来Pとして資料批判が抽出してきたテキストの冗長性は大きい。しかし、その意味は一様ではない。ある種のテキストは、文学性が乏しい単に定型的なもの（つまり、ある程度の権威をえた既製の文）と言えるが、他のテキストは高度に構造化された芸術文からなっている様に思われる。[42] 逆に言うと、Pとは冗長性が大きいという「見かけの」テキストの特徴だけを基準にして取り出されたテキストの集合体である。これは様式史研究の根本的欠陥――形態とその社会的適用範囲の関係を一義的・必然的なものとみる――とも対応している様に思われる。[43] 創世記一七章の文体は芸術的価値が高い。しかし、反復という冗長度の高まる手法を用いているので、物語の進展を遅らせている。別言すれば、詩的テキスト特有の範列論的（paradigmatic）関連の強いテキストであるため、物語の筋という連辞的側面が後退している。だが、だからと言ってこの章は「物語ではない、二次的部分」だということにはならない。筋の進行が常に速いと物語はおもしろくない。少くとも宗教的メッセージを担う物語ではなくなるのではなかろうか。次に一七章と前後の章の結合の仕方を見ておこう。

一六章と一七章は語レヴェルで巧妙に接続している。一六章一〇には「増える」(√brh)に関する地口があるが、一七章二はこれを受ける。この語はアブラハムの子孫に関する神の約束の前提となっている訳である。一六章一一と一七章二〇には共に人名イシマエルと「聞く」(√šm.ʿ シャーマア)に関する地口がある。つまり以上の二箇所でヤハウェの使いのことばと神(ヤハウェ)のことばは連結している。一七章と一八章前半はもっと直接的につながる。人名アブラハム及びサラは一七章五と一五で導入されたが一八章はそれを受ける。しかし、一八章冒頭には人名が欠けており(彼という形で出るだけ)六節ではじめて現れる。これはどう説明されるのか。一八章が一七章に連続しているということによってしか説明されえない。ヴェスターマンは一八章一―一六aをも「緊張が解消へと導かれる」という意味の物語ではないとみる。しかし、一七章と一八章前半を連続して読めば筋のつながりはちゃんとある。一七章一五以下をブレモンの図式に従って、サラに子が生れるという可能性の開示とみると、――アブラハムは信じないが「読者」にはわかる!――一八章はこの可能性が実現してゆく経過である。ただし、達成は二一章まで引き延ばされている。また、一七章一七のアブラハムの笑い(√ṣḥq 三人称単数 Imperfekt consecutivum ではワイツハク)と人名イツハク(一九節)の地口は、一八章一二以下のサラの笑いとも対応している。さらに、二一章一二節後半の翻訳困難ないいまわし「なぜならイツハクによってのみおまえには子孫が呼ばれるのだから」(グンケルの直訳 Denn nur nach Isaaq soll dir der Same genannt werden.)は、一七章を前提としなければ理解不可能である。

結論として、創世記一七章は、長い物語のひとつの段落であり、物語全体にとって非常に重要な意味を持つ。筋はここで停滞しているが、これは一八章後半―二〇章とともに神の約束がなかなか成就しない、――一八章前半と二一章は預言―成就のアーチをつくる――アブラハムにとって神は理解し難いものとなるという物語のメッセージと関連

している。〔以上で序説の前半部の叙述を終えた。「ミクロ構造」に関する体系的な考察は別の機会にしたいと思う。〕

註

(1) H. Barth-O. H. Steck, Exegese des Alten Testaments —Leitfaden der Methodik, Neukirchen-Vluyn 1971[2] (1978[8]), S. 30–39 の Literarkritik 及び S. 40 ff. の伝承史に関する記述参照。

(2) R. Smend, Die Entstehung des Alten Testaments, Kohlhammer 1978, S. 47–59 ; S. R. Driver, Introduction to the Literature of the Old Testament, Edinburgh 1891, pp. 123 ff. のリスト参照。

(3) R. Kilian, Die vorpriesterlichen Abrahams-Überlieferungen, Bonn 1966. 等がその典型。

(4) アブラハム物語とヤコブ・イサク物語との関係についての議論がその好例、R・ドゥ・ヴォー著(西村訳)『イスラエル古代史』教団出版(一九七七、原著一九七一)、一四五頁以下のM・ノートに対する批判を参照。Vgl. C. Westermann, Genesis (BK I/2), Neukirchener 1977, S. 139 ff.

(5) プロテスタント的世界観の投影としてのヴェルハウゼン(1844—1918)の宗教史がその典型である。

(6) R. Smend の前掲書・名 (Entstehung) に注目。

(7) 詩篇一九篇一一節 msprjm は erzählen「物語る」、ngjd は「報告する」の分詞形である(協会訳では、一節「あらわす」「しあす」となっている)。P・リクールは聖書のことばをポリフォニーに喩る。『解釈の革新』白水社(一九七八)七四頁。

(8) G. von Rad, Theologie des Alten Testaments, Bd. 1., München 1960 (1978[7]), S. 117–128.

(9) H. Gunkel, Genesis, Göttingen 1910[3] (1977[9]), Einleitung.

(10) H. F. Plett, Textwissenschaft und Textanalyse, Heidelberg 1979[2]

(11) アラン・ダンダス著(池上他訳)『民話の構造』大修館(一九八〇、原著一九六四)八五—九五頁。このような考え方は、K. L. Pike の Tagmemik に由来する。Kenneth L. Pike, Language in relation to a unified theory of the structure of human behavior, 2nd, rev. edit., The Hague-Paris. 1967.

(12) 千野栄一編『言語の芸術』(講座言語第4巻)大修館(一九八〇)一四七—一八〇頁所収。

(13) 池上氏は『意味論』大修館(一九七五)第8章「テキストにおける意味構造」でも同様の方法を使っている。

(14) W. Dressler, Einführung in die Textliguistik, Tübingen 1973; Plett a. a. O. 拙論『聖書ヘブル語統語論のテキスト言語学的考察』基督教学研究第三号一一七—一三一頁は、この方法の旧約テキストへの応用の試みである。

(15) V. J. Propp, Morfologija skazkii, Leningrad, 1928; deutsch, Morphologie des Märchens, München 1972. 、

(16) 現聖書テキストの構成を概観すべき Bibelkunde にまで資料批判が入り込むのは極めて問題である。C. Westermann の Bibelkunde はそうなってしまっている。ラートの六書研究の出発点が六書を「一つの類型」として理解する所にあったことを常に想起すべきである。もっともラートが「ヤハウィスト」に与えている役割に問題がないわけではない。Rad, Das formgeschichtliche Problem des Hexateuchs, 1938=Ges. Stud. zum AT, 1958, 1971[4], S. 9–86.

(17) 従来の編集史的方法は結局それまでの Literar-Kritik の延長にすぎない。Smend a. a. O. S. 38–46.

(18) 〃(12)一八—一二一四頁所収。

(19) 旧約の場合、サムエル記などは、口承文学として考察すべき点が多いと思われる。例えば「神がおまえにこうするよう、こうするように」May God do so to you and more also (RSV)（サムエル記上三章一七、一四章四四等）という表現は実用論的考察を要する。

(20) Ch. Küper, Linguistische Poetik, Kohlhammer 1976.

(21) 例えば、S. Bullough, The Question of Metre in Ps 1: VT 17 (1967) pp. 42–49.

(22) 小林英夫著作集5、みすず書房（一九七六）四一—一六一頁所収。

(23) H. Gunkel a. a. O. bes. I ff u. XXXI–XXXIII.

(24) 》größere literarische Einheiten《 とも言いかえることができる。H. Gunkel, Die israelitische Literatur, 1925=1963, Darmstadt S. 4; R. Rendtorff, Das überlieferungsgeschichtliche Problem des Pentateuch, BZAW 147, 1976. S. 7.

(25) Gunkel, Genesis, S. 291–293.

(26) E. Güttgemanns, Einleitende Bemerkungen zur strukturalen Erzählforschung, in: Linguistica Biblica 23/24, 1973 S. 2–47. では、ダンダスにならってプロップの機能を Motifeme に改造、Motifeme 相互の論理的関係を調べた。（彼は論理学を使う。）ders., Narrative Analyse synoptischer Texte, in: LB 25/26, 1973 S. 50–73. ではこの方法をルカ一五章一一—一三一等に適用しているが gewaltig である。ベルガーの「深層構造は神話論的妖怪」との訳はこの様な方

法への警告である。K. Berger, Exegese des Neuen Testaments. Neue Wege vom Text zur Auslegung, Heidelberg 1977 S. 130 f.

(27) クロード・ブレモン著(阪上訳)『物語のメッセージ』審美社(一九七五)特に六五頁以下 La logique des possibles narratifs, in: Communications 8 (1966) 60-76. の訳を参照。

(28) C. Westermann, Genesis I/2, S. 33 ff.

(29) 本文四、文献(5)イーザーの書、七三頁以下参照。

(30) 創世記二五章二七—三四、民数記一一章、サムエル記上一五章等。

(31) R. Rendtorff a. a. O., S. 34-40; C. Westermann a. a. O., S. 139-148, 490-493.

(32) P. Weimar, Aufbau und Struktur der priesterschriftlichen Jakobsgeschichte, ZAW 86 (1974), 174-203.

(33) M. Fishbane, Composition and Structure in the Jacob Cycle, JJS 26 (1975), 15-38: J. G. Gammie, Theological Interpretation By Way of Literary and Tradition Analysis: Gen 25-36, in: Encounter with the Text, ed. by M. J. Buss, Semeia Suppl. (1979), 117-134.

(34) C. Westermann, a. a. O., S. 305-328.

(35) R. Smend, a. a. O., S. 49.

(36) G・ムーナン著(福井他訳)『言語学とは何か』大修館(一九六九、原著一九六八)二〇三—二〇八頁。A・マルティネ編〈近代言語学大系—1〉『言語の本質』一八三—二一〇頁のP・ギローの論文をも参照。

(37) エーコ文献(4)二〇五頁以下にはスタインの A rose is a rose is a rose is a rose を例文とする重複性の過剰についての考察がある。rose という語は共示義的副コードと結びついていると考えられる。詩文は共示義(connotation)の豊かなテキストといえる。文献(4)I八六頁以下に共示義の定義がある。エーコの理論はパスカル的な繊細な思考に適した記号論といえる。佐藤信夫(『記号人間』一九七七)はチョムスキーがデカルト派ならエーコはパスカル派と言うが当っている。共示については、文献(1)八頁以下、文献(7)一三九頁以下参照。ロラン・バルト著『神話作用』のメタ言語に関する考察は今や古典的となった。

(38) まずヘブル詩に特徴的な Parallelismus membrorum に注目しなければならない。ここでは例文は「P資料」からとった。なおヘブル語は完全に子音テキストとして表記する。

詩篇から美的過剰コードを見つけるのは、容易である。一一五篇、一三五篇、一三六篇。「ハレルヤ」は一四七篇等では投入句的に反復されたのではないか。宗教的歌曲を考察の

範囲に入れれば過剰コードの例は無数にある。W・A・モーツアルトの『エクスルターテ・ユビラーテ』の終曲「アレルヤ」を想起すれば十分であろう。

(39) D. Bonhoeffer, Schöpfung und Fall, München 1958 (=1937) S. 39–46; K. Barth, Kirchliche Dogmatik Bd. III/1 S. 220.

(40) シクロフスキーのことば、文献(7)一一六—一二一頁参照。

(41) 註(14)の拙論。

(42) 定型表現の背後には何らかの権威が存在する。旧約テキストの定型については、従来、様式史が扱ってきたが、記号生産の理論やコード理論からの解明を要する。

(43) Berger a. a. O. S. 33-36 の M. Dibelius や R. Bultmann に対する批判参照。社会的適用範囲に対する言語形態・Form の関係は相対的に多価 relative Polyvalenz である。形態と内容は分ち難く結びつけ、形態と生の座 Sitz im Leben は相互に分離しなければならぬ。